



発行所
財団法人 漁船海難遺児育英会
東京都千代田区内神田
2丁目2番1号
鎌倉河岸ビル内
電話 03(256)1981
03(256)8394
印刷 柳連合印刷センター
電話 03(582)8541

父さん聞いていますか

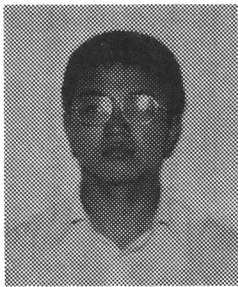


帝京第五高等学校

二年 中川志保

今、私がこうして成長し私立高校へ通えるのはみんな母さんのおかげです。私が生まれて六カ月の時父さんに死なれ、四人の子供をかかえ、悩んだことと思います。それなのに、十七年間私達にぐちひとつこぼさずここまでしてくるには、なまたいのことではないなかなと思います。四人の子供をみんな高校に出し、私だけ私立というたいへんお金のかかるところに入れて

母の苦勞



島根県立浜田高校

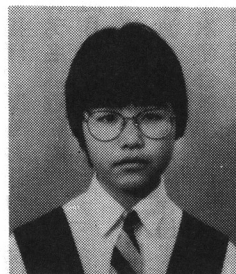
二年 川村清一

僕の家族は、兄と母と僕の三人です。と、いっても、兄は、七年ほど前、高校を卒業して京都の方へ働きに出たので、盆や正月しか帰って来ません。だから、いつもは、母と僕の二人で暮らしています。生活も、母の頑張りのおかげで何不足なく裕福なものです。ところが、ときどき、母は仕事から帰ってくるやいなや、疲れたという、夕

「なんで、御飯してくれないんだよ。」などと言っている今日このごろです。でも、こうやって作文を書いているとき、なんだか、母に文句を言ったことが恥ずかしいような気がします。話はかわって、父のことですが、僕が母のお腹にいるときに死んだので、全く父の思い出はありません。それどころか、父という存在を実感し始めたのは、確か、小学校のときの父親参観日のころからだと思っています。そして今まで何よりもうれしかったことは、小学二年の時、担任の先生がさりげなく、「清ちゃん、お父さんからのプレゼントだよ。」と言って青い上等の縄飛びをくれたことです。今でも、なぜかしら、その時の様子が走馬燈のように頭に駆けめぐって来るのです。これは、

「なぜ父さんは死んでしまったの。」なんて聞けません。私が聞くと、母さんはまた、あの悲しい日のことを思い出さなくてははいけません。そんなことより写真でしか知らない顔だけれど、いつも私の心の中で父さんは生きていて、それでいいと思うのです。父さんは、空の上から私たちのことを見守ってくれていることだと思います。小学校の頃一度だけ、「あんたんと、お父さんおらんけん。」って、言われたことがありました。どんなに辛かったことか。「なぜ父さんは死んでしまったの。」と、母さんに隠れて泣いたこともありました。今だに忘れることのできない悲しい出来事でした。友達が父さんのことを話しているとやっぱり入っていく気にはなれなかつたけれど今では父さんの写真を見せて「私と似てると思う。」なんて聞いています。

私は父さんにだっこしてもらった覚えもありません。一緒に写っている写真の父とは直接関係のあることではありませんが、父のことを考えるとき、頭の中に浮かんできます。今考えるに母や兄は、直接父の死を体験しているのではなく、それに比べると僕は幸せだったのでないかと思っています。僕が、小さい時はいろいろなところにあずけられました。だから、母がどこかのおばさんであるかと思った時期もありました。そして、母にもいろいろ迷惑をかけました。母の仕事場で暴れたり、幼稚園からぬけ出したり、町の真ん中で大声で泣いたり……僕の覚えられていることもまだまだあります。今、その時のことを母に聞くと、本当にたいへんだったそうです。その中で母は、兄の世話、そして仕事から遅く帰って来て、真夜中に僕のオムツなど洗ってくれていたのです。おまけに帰ってか仕事と……ほとんど寝る時間がなか



萩光塩学院高等部

二年 中村千浩

今年の三月、父の十三回忌でした。この十三年を母も祖母も、長いようであつた。早く十年たてばいいと思つていた」と言います。

しかし私にとって、特別な年月ではありません。父の存在は私の中には「これ」と言つてないのです。船に乗つて海へ出た父は、何カ月も家に帰つたはずで、「よく、あの小さい体でやつたなあ？」と今、僕自身、母をあきれて見るしだいです。今年の一月には、兄の結婚式がありました。その中で、母の眼から涙が流れるのを見ました。この涙を見て、僕も思わず涙を流しました。母の苦勞を思えば思うほど、涙が不思議と出ました。「お母さん御苦勞さま……」その気持ちでいっぱいでした。母の今までの苦勞を象徴するかのよう、結婚式は本当に素晴らしいものでした。最後に、これから兄と僕で力をあわせ、今まで母が苦勞したことを何十倍も幸せにして返そうと思つています。

一人、遠い遠い所に旅に出てしまつてもう帰ってくることもない旅にでも父さんはいつまでも私の心の中で生きています。 (千798-02 愛媛県宇和島市蔭瀬)

てこなかつたし、例え帰ってきたとしても、それはほんのわずかな。一年間で父のいない生活の方が多かったのです。それに、父が亡くなったとき私は三歳で、父の顔など写真がなければ想像もつかないでしょう。どのくらい家にいたのか、先ほど自信もって書いていますが、すべて私の記憶ではなく聞かされたものなのです。母や祖母に、父の趣味、性格、くせなど、今でも時々聞かれています。

しかしどれをとってみても現実、自分で、自分の目でそれを確かめることができないことは、とても残念です。私は今まで、寂しい思いをしたことがありません。わりと鈍感で何を言われても平気なので、寂しい思いをしなくてすむのかと思つたりします。けれど、やはり感謝しなければならぬ人がいます。母です。

思えば、小学校に入つた時点、もう父のいない私にとって、学校からの書類の保護者名はいつも母でした。その時おかしなもので、私は、母の名前が何となくめだつたのではないのか、とほんの少しうれしさを感じていたのです。それほど母の存在は、母、というだけのものではなく、母兼父という、母にとっては荷の重たい存在だったのです。けれど私が一番尊敬しているのはやはり母で、これはどうしても変えることのできない事実です。

現在高二の私が何となく暮らすことができ、他の人よりもずっと幸せだと思えるのは、やはり母のおかげです。三歳から十六歳まで、母のいない生活はごくわずかです。そのわずか、

保護者名はいつも母

真さえないのです。せめて一枚くらいと思つて探したけれど、ありませんでした。天国から父さんの今の写真送つてくれますか。そして、天国から私が立派な看護婦になれるように、見て下さい。

父さん見てくれますか
こんなに成長した私を
感謝して下さい母さんに
あなたは私達を残して

一人、遠い遠い所に旅に出てしまつてもう帰ってくることもない旅にでも父さんはいつまでも私の心の中で生きています。

第二回願書受付締切
昭和六十年
七月三十一日

山口県萩市上野一〇三三六

(昭和60年 6 月末現在)

▽笠井一之（三重県亀山市）▽東京築